

## チェルヌィシェフスキーの歴史哲学(IIb)

武井勇四郎

チェルヌィシェフスキーの歴史哲学の基柱は、ロシアの共同体制度オプシチナがロシアの進むべき歴史運動において本質的にどう作用するかという彼のロシア農村共同体観にある。端的に言えば、それは彼の農民社会主義の特性を成すオプシチナ観である。彼の農民社会主義は、比喩的に言えば、自国ロシアの農奴法と専制政治に対する痛烈な批判を縦糸に、1848年に象徴的にその矛盾が示された西欧資本主義に対する手きびしい批判を横糸にして、オプシチナの図柄をあしらって織り成されたスラヴ模様の織布である。よってここでチェルヌィシェフスキーの農村共同体観を論題として取り上げなければならない。おおまかに言えば、彼の共同体観は彼独自の想になるものでなく、むしろプロイセンの農業経済学者ハクストハウゼンの実証的研究に触発されたものである。つまり彼の労作『ロシア国内状態、国民生活、そして特に土地制度についての研究』（1847～52）が大きな刺激となっているのである。この労作は、また、革命的・空想社会主義者以外の改革＝自由主義者にも、スラヴ主義者にも、多大の影響を及ぼしていることを指摘しておかなければならない。自由主義経済学者ヴェルナツキー陣営は自らの改革路線を敷設するためにこの労作を共同体解体論に用いていたし、またスラヴ主義者はスラヴ主義者で前ピョートル時代のロシアの正教的共同体精神が今もって生きていることの証拠にしようとした。既にペトラシェフスキー会員の幾人かはロシアのオプシチナ、ミール制度をフーリエのファランステールに類する現実的制度と見做してはいたが、彼らはロシアのオプシチナをただ直観的に見ただけ

のことで、その実証的研究をしたわけでもないし、ましてやその歴史的意義を解明したわけでもない。むしろ、オブシチナをロシアの未来の歴史運動の中で意識的に考察せしめるようにしたのは、ゲルツェンの場合では1848年革命の敗北であるし、チェルヌィシェフスキーの場合では、差迫した1861年の農奴解放であった。ハクストハウゼンの労作がこの歴史的文脈の中で両者にコミットしたのである。ハクストハウゼンの労作以前、ロシアのインテリゲンチヤはいまだ自国のオブシチナを実証的に社会経済史的に研究していなかったもので、当時、インテリゲンチヤは外国人によって自国の農村共同体制度、その慣行・精神を知らしめられるという皮肉な結果となったのである。しかし、フーリエのファランステールの構想がペトラシェフスキー会を通じてロシアに流入していなかったならば、ハクストハウゼンのこの労作はかくも大きな波紋をロシアのインテリゲンチヤに投げかけることはなかったであろう。その会は既に『ロシアの国内状態……』を翻案する素地を作っていたのである。チェルヌィシェフスキーは既に大学生時代にペトラシェフスキー会員の幾人かと接触していたので、ハクストハウゼンの労作のもつ意義を容易に理解することができ、しかもロシアの歴史的文脈の中に収めて活用できるものと洞察したのである。チェルヌィシェフスキーは西欧の数多くの思想家から多種多様のことを学びとっていたが、こと共同体論に関してはハクストハウゼンが先輩格であったことを、まずもって指摘しなければならない。ハクストハウゼンのロシア共同体観がロシアのインテリゲンチヤに様々な影を落とし、中でもゲルツェンとチェルヌィシェフスキーのロシア《農民社会主義》の誕生の一助となり、尚かつその社会主義が60～70年代の革命的ナロードニキ思想の、更に進んで80年代までのロシア社会思想の淵源に当るものとなっている以上、ハクストハウゼンのロシア社会思想史上における位置は決して無視され得るものではない。

チェルヌィシェフスキーは1857年の論壇月評No.4, No.5 にすぐつづいて同年ハクストハウゼンの労作『ロシアの国内状態……』を『現代人』誌上で取り

上げ、おびたしい直接引用の手を用いてその概略を読者に伝えている。これは *laissez faire, laissez passer* を標榜して共同体解体を強弁していた自由主義経済学者たちがハクストハウゼンの労作を自己の改革路線に合せてどれだけ曲解していたかを曝露するためのものであった。後述することになるが、ハクストハウゼンのこの労作はとりようによって自由主義的にでも、社会主義的にでも色々に解釈できる曖昧な性格を事実もっている代物であった。無論のこと、テンゴボルスキーもヴェルナツキーも西欧型資本主義をこそロシアの近代化の唯一の目標に定めていたのでロシアのオプシチナを資本主義的所有制への最大の障碍物と見做し、ハクストハウゼンの本をもってその傍証にしようとした。ヴェルナツキーは『経済指標』誌に『土地所有について』(1857)の論文を発表して共同体的土地所有制の私的土地所有制への強引な移行を提唱した。チェルヌィシェフスキーは早速同じ題名の論文を進んで『現代人』誌に発表し、真向うから彼に論戦を挑んだ。

チェルヌィシェフスキーの歴史哲学の屋台骨をなす論壇月評No.4, No.5の中にはハクストハウゼンの名は見当たらないが、この月評には明らかに彼の見地がうかがわれる、というのはこの月評に頻出する「プロレタリアートの潰瘍」なる用語はハクストハウゼンの「<sup>ハウヘリズム</sup>社会的窮乏とプロレタリアート——これは最新の西欧諸国家の有機体によって生みだされた化膿した潰瘍である」という句から採られたものであり、更に共同体的土地所有はプロレタリアートの発生を喰い止めるという見地もまたハクストハウゼンの見地と同趣であるからである。チェルヌィシェフスキーはハクストハウゼンの仕事についてはかなり早くから関心を持っていたと推察できる節々がある。既に10年前の1847年の『現代人』誌は同年出版されたハクストハウゼンの労作を紹介している。

当時の共同体論争の時に彼自身このことを指摘し読者に喚起を促している。しかし、どの時点でハクストハウゼンの原書を読んだかは詳らかにしにくい。チチュリン『ロシアにおける農村共同体の史的発展概説』(1856)やテンゴボルスキー“*Etudes sur les forces productives de la Russie*”

(1852~55)のヴェルナツキー露訳『ロシアの生産力について』(1854~58)が出版され、スラヴ主義者サマリン、コシュリエフと西欧主義者チチェリンと間に白熱した共同体論争が1856年に起ったことなどからして、この頃であると推察できる。そして丁度この頃はチェルヌィシエフスキーが文芸評論家から社会・政治・経済評論家に転身した時期である。

さて、ロシアのチェルヌィシエフスキーはプロイセンの農業経済学者の手になる『ロシアの国内状態……』をこの当時、彼の立場からどのように評価し、自己の歴史哲学の骨組のなかに組入れたのであろうか。まず彼のハクストハウゼン評から始めよう。彼の評によれば、ハクストハウゼンは共和主義者はおろか<sup>リベラル</sup>自由主義者でもなければ、単なる保守主義的ですらなく、プロシアの地主によくみられる一介の反動主義者であり、1848年革命によって導入された立憲制はおろかそれ以前の身分議会制をも王制の凋落に導いた張本人と見做し、無制限君主制ないしは専制の再興こそプロシアを救う唯一の手段と考えた人物である。チェルヌィシエフスキーによれば、この如き人物が社会主義や共産主義に特別な感情を抱くことは怪しむに足りなく、事実、これらの主義を忌み嫌い「悪魔の申し子」とまで名付けて反動主義ぶりに徹した。しかし、彼の政治的見解とは裏腹に彼の農業制度の実証的研究はプロイセンでは高く評価されて来た。つまり彼は頭の中では保守反動にこり固っていたが、実践的行動の面ではそれと逆の動きをしたのである。即ち、農村経済上の研究になるや否や、プロシアの地主的姿は消え、博識な経験豊かな炯眼な学者となり、例えば彼の研究した制度が人民経済に不利益とわかれれば自己の政治的見解を投げうってまでもその制度を拒否し、逆に有益とわかれれば彼の政党が嫌悪を示す農業制度を擁護するといった具合である。チェルヌィシエフスキーは、「経済的部門は政治的偏見や偏愛と無縁でなければならぬ、つまり国民的福祉についての諸問題は政治的組織の諸形態についての諸問題よりも上位にある。しかも経済的諸問題は政治的諸問題と必然的なつながりをもっていない」というハクストハウゼンの言葉を文字通り受け容れて、



それをそのままハクストハウゼン評の尺度にしたのである。したがってハクストハウゼンのイデオロギー的政治的立場と経済的実証的研究とを切り離して、後者の研究業績を高く評価したのである。特にチエルヌィシエフスキーは、個々の欠点は見受けられるにしても全般的にみればハクストハウゼンのロシアの共同体的土地所有とその慣行にたいする見識は当代一流とみた。序でに言えば、ゲルツェンのハクストハウゼン評もチエルヌィシエフスキーのそれと同趣のもので大差ない。ゲルツェンも彼を反動主義者と性格付けながらも彼の共同体論には舌を巻かざるを得なかったのである。

ところが興味深いことにこのハクストハウゼン、こともあろうに丁度チエルヌィシエフスキーが彼の労作にふれ、またロシアの共同体擁護の諸論文を書いている頃、1857年1月7日に設置された「農民問題秘密委員会」のメンバーとしてツァーリの改革案作成に一枚加っていたのである。勿論、チエルヌィシエフスキーはこの事を露しらなかったことであろう。『ロシアの国内状態……』の著者は10年後に、その保守性を高く買われて農奴解放の改革案に実際家として手を染めていたのである。ハクストハウゼン自身あの労作を書いた時には、ロシアは今日西欧に差迫っている革命的志向になんか少しも恐れるに足らない、社会的窮乏、プロレタリアート、社会主義および共産主義の学説に恐れる必要はない、何故ならばこの面ではロシアは病気などにかかっていない健康な有機体であるから、と述べていたが、現に1848年の革命を招いてからはハクストハウゼンはむしろ反動的な性格を強め、もしロシアが改革に手遅れとなるならばロシアが革命の口火を切り、あまつさえ全ヨーロッパの社会主義革命の合図ともなりかねないとロシアの上層貴族に論じていたのである。この事情を考え合せると、1857年にチエルヌィシエフスキーがハクストハウゼンの反動的な政治的性格を手きびしく論難したことは、『ロシアの国内状態……』を自由主義的路線に合せて解釈していたヴェルナツキー一派へのまことに見事な頂門の一針であったと言えよう。何故ならばまさに1857年に4年後に控えた農奴解放の噂が流れ、農奴農民も平民インテリゲンチヤ

も1861年に何らかの意味で「期待」を寄せていたからである。そして西<sup>ザ</sup>欧<sup>ハトニ</sup>主義・自由主義者はロシアを西欧型資本主義路線に乗せることに懸命であったからである。チェルヌシシエフスキー自身も1857年が農奴解放着手の年であることを明確に意識し、その偽瞞的性格をこの時点で既に看破していた。彼の1857年9月5日付のゼレヌィ宛の書簡はこのことをはっきりと物語っている、——人々は皇帝の立派な配慮について語っています。地主とその百姓のことに關してです。つまり10月初旬に期待を抱いています（おそらくもっと早くなる）。宣言の根本をこう見えています。1）友誼的協定のとりきめのための二年間、2）二年後に政府は、地主と農民とが条件で折合がつかなかった場合、仲介の労をとる、3）この上もう二年。全部で四年経って万事は正常な状態にならなければならない、と。続くもう一通のゼレヌィ宛の書簡にはこうある、——社会ニュースの中で従来通りペテルブルグの関心を呼んでいるのは農民解放の勅令です。それは署名されました、そして間もなく布告されるでしょう。しかしこれは全然解放についての勅令ではなく、むしろ友誼的取引への単なる招待であることがわかっています。しかも専横に抗する農民の若干の保証が規定されています、つまり、1）地主は農民移住の目的で彼らを買却できない、そして、2）農民間の婚姻は地主の介入なしで行なわれる。若干の人々はつけ加えます、最大限 maximum の年貢と最大限 maximum の買戻支払金が規定されています。故に一定の金額を支払う農民は賦役労働に向けられ得ない、ないしは買却から免がれる。これらすべてのことは、御覧のように1842年の勅令の継続です。したがって私は支持しません、また称揚するわけにもまいりません、と。チェルヌシシエフスキーはこの切迫した問題意識の中で、別言すれば、4年後に控えた農奴解放のまともな対処を求めてハクストハウゼンのロシア共同体論の内実を分析しなければならなかった。これはとりも直さず自己の立場を自由主義=改革主義者に対峙して提示することでもあった。

さてここでハクストハウゼンのロシア共同体説の概略を示し、それをチェ

ルヌィシェフスキーがどう把握して自らの歴史哲学の中に組み入れたかを考察しよう。

ハクストハウゼンによるロシアの農村共同体の土地所有制の有様はこうである。農村共同体の全住民人口は一つの団体を構成している。耕地、野原、草原、牧場、森林、小川、池などすべてはこの団体に帰属する。各家族の男子はこれらの利用の平等権をもち、分与地は男子の人数数比例の土地分割の原則に従う。人口の増加に伴なって分与地は変化を受ける、死と同時に分与地は共同体に戻り出生とともに利用権を得る。森林、牧場、狩猟、漁獲等の権利は変わらない。分与地は共同体成員の集会の中で、地味の豊かな土地、土地の遠隔などを考慮して、出来るだけ公正が支配するように取り決められる。分与地の決定には共同体精神が支配し、無駄な軋轢が生じない。最古のスラヴ法典、全民族に共通な土地所有の原理が支配する。各男子は平等な分与権を得るが、それと引換えに賦役、年貢の義務を負う。土地分与はその後人数によるものでなくチャグロによるものになった。冬の農民の副業である手工業もアルテリという形態をとって行なわれ、収益は構成員に平等に分配される。

以上の土地の共同体的所有に対してハクストハウゼンは自ら二つの提題を示した。

〔I〕ロシアの共同体は「プロレタリアートの潰瘍」を予防できる。

〔II〕ロシアの共同体は農村経済の成功、生産力の高揚にとって障害物である。

この二つの提題は一見して互いに異質の内容を持つように見えるし、その故互いに不両立性を示しているように見える。これはまたハクストハウゼン自身の曖昧さと矛盾を示しているものでもある、つまりハクストハウゼンによればロシアの共同体的土地所有はプロレタリアートを産みださないから、ロシアは革命を恐れるに足らない、がしかし現存の農村共同体的土地所有制が活きている以上生産力を伸ばすことはできない、何故ならば歴史的に見れば

西欧の先進諸国が生産力を伸ばした主要な原因は、私的土地所有制にあったから。ハクストハウゼン自身はこの不両立性を解消するすべを提出していない。このことが手伝ってロシアの自由主義的改革者に次の一般的見解を取らせるようにした、つまり共同体は農村経済の成功にとっての障害物である以上、何よりも解体することが先決であり、私的土地所有に伴なうプロレタリアートの発生はやむを得ない。何故ならばハクストハウゼン同様に、ロシアの後進性の最大の原因の一つは封建的な家父長制的土地所有制にあり、これがロシアの近代化をはばんでいるからである。彼らは第二の提題から第一の提題へと推論を進め、ハクストハウゼンの二つの提題の不両立性をきわだたせた。既ち第二提題を積極的に採用することは共同体解体を意味し、よってプロレタリアートの発生は不可避であるという結論である。チチュリン、テンゴボルスキー、ヴェルナツキー、ストルーコフ、バプストラは皆この見地に傾いたのである。そして歴史の発展過程に徴してみれば、この見地は現代においてもまとものものとして評されるであろう。

しかし、チェルヌィシエフスキーはこの二提題を不両立としなかったのである。彼は何よりもまず勤労農民大衆の利害擁護の立場に立って〔I〕の提題を積極的に肯定することから始め、次に〔II〕の提題の妥当性に疑義をさしはさみ、更にこれに対して彼独自の反論を加え、この提題の否定に向った。ここに既に、自由主義者と違ったチェルヌィシエフスキーの共同体理解に拠るロシアの歴史観が面目躍如として現われる。つまり彼は共同体はプロレタリアートを防止するだけでなく、一定の条件を満される時には、それがまた農村経済の成功につながるとし、ハクストハウゼンの〔I〕と〔II〕の提題を両立不可能としなかったのである。ではどうして両立可能であるのか。

〔I〕と〔II〕の関係を社会主義者としてのチェルヌィシエフスキーがどう処理したかを吟味してみよう。

〔I〕の提題から始めよう。ハクストハウゼンの見方によれば、ロシアの農村共同体は、疑いもなく、ロシアの内的社会的状態にとって測りしれない

ほど利点をもつ「自由な」制度である、何故ならばそこには他の諸国では決して見かけられない有機的連繫と強固な社会的諸力および秩序とがあり、それが存続する限りはプロレタリアートは存在もしないし形成もされ得ないからである。ハクストハウゼンは共同体についてこう要約する、——ロシアの共同体制度は限りなくロシアにとって重要である、特に現時点において、国家的関係において。西欧諸国家のすべては破滅の恐威にさらされ、その治療がまだ未解決の課題となっているところの一つの病気で苦しんでいる、——プロレタリア化という社会的窮乏バウペリクスムに苦悩している。ロシアはこの貧困を知らない、ロシアはその共同体制度によってそれを予防している。ロシア人はそれぞれ祖国の土地をもち、その分与権をもっている。彼自身が個人的にこの分与地を拒否したりそれを失ったりしても、彼の子供たちには共同体の成員としてそれぞれ分与地を自分に要求する独自の権利は残るのである。ロシアには賤民(Pöbel)はいない、そこにいるのは人民ナロードだけである、そしてもし賤民にとって余計な不動産所有といったものがないなら…… この制度の原理は全ロシアにわたって同一である、何故ならばそれは外から何らの処置も受けずに、ロシア国民の根本的性格から自ら発展してきたからである、と。ハクストハウゼンにはオプシチナは「プロレタリアートの化膿した潰瘍」の発生を喰いとめる健康な有機体でサン＝シモン流の共産主義理念の具現とも映った。彼によれば、サン＝シモン主義や共産主義を西欧の諸国家の要人は「未熟な幻想」「粗笨なうすべりの」理念で青年や大衆をたぶらかす危険物と見做しているが、実はこの理念の出現こそ西欧の人間精神の自然的発展と教育の状態に決定的に依拠しているもので、もとをただせば社会的諸関係の病的状態の兆候にすぎないのである。よってハクストハウゼンによれば、西欧に反してロシアは「全く国民的ナショナルな、君主制の諸原理と合致した諸原理に基礎をもつ」オプシチナがあるので、つまり共同体的土地利用の制度があるのでプロレタリアートの発生を防止し得るし、それによる社会的不穏はないからロシアは西欧の如き革命を恐れる必要はない。ここで強調しなければな



らないことは、ハクストハウゼンがオブシチナをロシアの救済手段であり得るとしたのは、ロシアが君主制であるべきという前提においてである。そしてここにこそ彼の保守反動の政治的性格は見事に浮彫される。彼は、サン＝シモン主義を未来の社会像として讚美したのでは決してない、むしろ逆に1848年革命を前にして、プロレタリアートが発生し得ないような所有制度を求めていた時、ロシアの家父長制的の共同体制度に目がとまったのである。先に述べたように、チェルヌィシェフスキーはハクストハウゼンの政治的文脈を正しく理解していたので、彼がサン＝シモンを現時点において引き合に出すのは、まるで重商主義や重農主義を引き合に出すと同じで、いわば彼の危機感の表明にほかならなと見た。したがってチェルヌィシェフスキーは〔I〕の提題をハクストハウゼンの政治的見地から切り離した、つまり、オブシチナを君主的政治体制から切り離して、純然たる経済的単位、別言すれば共同体における土地所有と利用の制度にしたのである。このチェルヌィシェフスキーの経済的観点への力点の置き方は、ハクストハウゼンの保守的的反動的な政治的観点を消去する点では一応の成功をみているが、しかし、今度は逆に、オブシチナを国家的・政治的支配制度から分離切断するという安易な社会認識につながる道を残した。というのはオブシチナはゲルツェンやチェルヌィシェフスキーが思うほど国家権力外の、財政単位外の、「自由な」天地ではなかったからである。したがってチェルヌィシェフスキーは、自由主義者チチェリンが『ロシアの国内状態……』を下敷にしながらも、ハクストハウゼンの言うようにロシアの農村共同体発生を家父長制的発生とせず、むしろ国家的支配的傾向を帯びて16世紀に発生したものとしたが、そのチチェリンのそれ自体きわめてまともな国家的性格の認識を、正しく受けとめ得なかった。チチェリンはその著の中で考察を四点に要約して述べている、——農村制度の史的観点から我々は次のことを導き出すことができる。

1. 我々の農村共同体は、全然家父長制的なものでも種族的なものでもなく、国家的なもの直接的影響下で、政府によって建てられたものである。

2. それは歴史的運動のただなかで自らの性格を保持していた他のスラヴ諸民族の共同体と似ても似つかないものである。それはその独自性をもっているのである。しかしその独自性は、西欧のスラヴ諸種族の歴史と何らの共通性をも持ち合わせていない、ロシアの歴史に特に由来しているものである。

3. 我国の農村共同体は自らの歴史をもち、ロシアの全ての社会的及び国家的生活もそれに沿って発展して来たと同じ原理に沿って発展して来たのであった。それは種族的共同体から所有者の共同体となり、そして所有者の共同体から国家的共同体になった。中世の共同体的制度は現今の制度と少しも似ていなかった。つまり、当時は一般的土地所有はなかった、各成員の相続権の制限もなかった、土地割替えもなかった、別の場所への移住権の制限もなかった、土地耕作者の大村落への融合もなかった、内輪の裁判も制裁もなかった、共同体の警察もなかった、共同体的経済制度もなかった。すべては年貢の徴集と土地所有者のための納税履行に限られていた、そして農村共同体の意識は純粹に所有者的及び財産的意義であった。

4. 農村共同体の現今の組織は、16世紀末から土地耕作者におかれた階層的義務に由来していた、そしてとりわけ彼らを居住地に堅縛することに、また年貢を農奴に分割することに由来していた、と(傍点一引用者)。

以上の四点にわたるロシア共同体のチチュリンの性格付けについては、チュルヌィシエフスキーは直接論評を下していないが、ハクストハウゼンの労作についての意見や『土地所有について』第一第二論文などの見地から見て、チチュリンの第一点の国家と共同体との有機的關係について、チュルヌィシエフスキーの認識は不明確である。第二点については後述するが、彼はチチュリンとは逆に、ロシアの共同体をロシア特有のものとは見ず、歴史発展における普遍的な遍在的な一段階とみている。第三第四の共同体の連帯共同責任による年貢・納税義務については、チュルヌィシエフスキーは明確な認識をもっていない。よって彼は土地の共同体的所有と密接不可分に結びついていた統制的・財政的組織単位を消去し、逆に経済的・生産組織単位としての土

地の所有形態のみを抽出する。つまり、共同体内の縦の支配関係を落し、横の成員関係のみを過重視する、ここに共同体の内的な複雑な構造を単純化し、オブシチナを理想化する傾向が現われる。

したがって〔I〕の提題——ロシアの共同体は「プロレタリアートの潰瘍」を予防できる——を、彼は現実的文脈から離れて、むしろ彼の社会主義の要請から受容する向きを強くしている。彼はハクストハウゼンのこの提題をとにかく農民社会主義社会建設の視点から積極的に受け採りラジカルに焼直してしまった。だから近々の未来社会のために共同体を解体せず<sup>に</sup>温存<sup>すべき</sup>である<sup>と</sup>ある意味では強弁するのである。しかしただ単に要請として強弁したわけではない。〔II〕の提題——ロシアの共同体は農村経済の成功、生産力の高揚にとって障碍物である——に対するチェルヌシシェフスキーの態度に移ろう。

ハクストハウゼンは、ロシアの共同体はプロレタリアートの発生を防ぎ止めている反面、この共同体制度の基礎にあつては農村経済の成功の諸条件はないか、非常に困難であり、また低程度にいつまでも押えられるため危機が訪れるであろう、と述べ、そしてその原因として、分与地の所有者が毎年の土地割替のため一定の長期間の耕作を行えないので土地改善に資本を投下する気にならない点をあげている。彼によればイギリスの如き先進資本主義国が農業を発達せしめるようになったのは、都市工業の発達による工業労働人口の増大であり、これがまた農業の資本制的大規模経営に向かわせる要因となった、しかしロシアにあつては都市工業の発達は微々たるもので農村経済にほとんど刺激を与えていない、よつてロシアの共同体的農業生産は、むしろロシアの後れた一般的社会状態に、つまり専制君主制に完全にマッチしている。君主制の再興こそ人類の救済であるとした反動主義者ハクストハウゼンとしては共同体を解体してまでロシアの近代化を計ることは余計なことであつたろう。しかし『ロシアの国内状態……』を下敷にして『ロシアの生産力について』を著わしたテングボルスキーはもっと自由主義的傾向でハクスト

ハウゼンを解釈したのである。前者は後者と同様に、ロシアの農業生産力の高まらぬ要因として、共同体全体に課せられた年貢・賦役の完遂の必要上チャグロと家族労働者数に比例して均分な土地分割(分与地)を行っていること、分与地の所有が一代限りであるため農民は土地改善に興味がないこと、分与地が相互に連絡なくバラバラに細分化されているため労働能率が悪いことを数え、約言すれば、土地に対する平等の分与権と共同体的土地利用慣行(精神)に堅められた保守的な家父長的制度を挙げた。テンゴボルスキーの翻訳者ヴェルナツキーがこの彼の説を踏襲して共同体解体論に走ったことは指摘するまでもない。ところでチェルヌィシエフスキーはこのハクストハウゼン、テンゴボルスキーらの言う〔II〕の提題に対してどう対処したかがここでの論及点となる。仮にチェルヌィシエフスキーが〔I〕の提題を前面に出すだけで、〔II〕の提題をそのまま受けるならハクストハウゼンの如く〔I〕と〔II〕の不両立の立場に立たされ矛盾に陥ってしまい、ヴェルナツキーらへの有力な論駁ともなり得ないことは一見して明らかである。そうとなれば〔II〕の提題を否定する方向に策を立てなければならぬことは必至である。そこで土地の共同体的所有の形態にあってもロシアの農村経済の成功の余地は十分にあるという論拠なり根拠を提示する必要が起る。チェルヌィシエフスキーは、共同体的所有が生産性を低下せしめるという自由主義的経済学者の見地をまず論駁するために、先進資本主義国イギリスの資本制的農業とフランスの小作制の欠陥を明示した。イギリスの大農場制は地主、経営主(資本家)、農民の三階級から構成され、三者の利害は相互に対立する、地主は土地改良に関心を示さず地代をすべて浪費し、経営主はそれに関心を示すが土地改良の収益の大半は地主に取りあげられたり土地契約満期ですべての改善を失う、最後に「すべてを生産する」農民労働者は経営主によって生活再生産の最低限まで搾取される無産農民 батрак であって土地、改良や教養知識に無頓着である。そのため経営主の細心の改良は台無しになる。チェルヌィシエフスキーはこのイギリ

ス式の農業経済にこう裁断を下す、——農場経営は所有と流動資本との、資本と労働との、知識とその占有との統一にクサビを入れる社会的諸関係から発している、また不労所得および肉体的・知的労働の必要な統一にクサビを入れることから発生している。よって、無為な不労所得と剰余物生産活動 *избыточествующие* に利害をもつこの制度の根は、農村経済の成功に全然関心を示さない、と。このイギリス式農業経済活動に働いているものと言え、物質的利害のみで、人間の道徳的・精神的関心が全く欠如している。後述するが、物質的資本と道徳的資本との統一が欠けているため農村経済の成功は、自由主義経済学者が言うほど決して大きいものではない。ここには明らかにチェルヌィシェフスキーの西欧資本主義批判が、階級分裂に伴う利害対立の弊害の指摘で示されていると同時に、その批判のスタイルには個人の利害と社会全体の利害は一致すべきとする功利的人間学的色彩がうかがわれる。

フランスにあってはどうか。彼によれば、フランスは生産手段としての機械や発明用具、犁や馬ですら導入できないほど土地は細分化された零細農業の典型の国である。フランスの農民が小作として自己の土地を所有していることはそれ自体「結構」なことだが、細分化が蒸気犁、打穀機、刈入機の導入を与えず、干潟、灌漑、施肥、家畜改良のための資本が、収益が少ないので、畜積されない。したがって今後零細農は自分の土地を徐々に大資本家に売って農村プロレタリアートに零落して行く運命を荷わざるを得ない。結局、フランスはイギリスとロシアとの中間に位するもので農村経済は低迷していると断ぜられる。

こうしてチェルヌィシェフスキーには、イギリスの大農場経営とフランスの零細経営はいずれも長所と同時に大きな欠陥を持っているためロシアの進むべき範疇とはなり得ない。そうとすればロシアの土地の共同体的所有の制度はこれらの欠点・矛盾を補填して余りあるものではないかという発想に導びかれ、彼は〔Ⅰ〕の提題を全面的にまず肯定し、次に〔Ⅱ〕の提題を否定して、共同体のもつ様々な優位性を歴史学的面からも、経済学的面からも人



間学的面からも言い及ぶ必要を感じた。彼の言うには歴史の発展理論から見るなら、歴史は三つの段階を踏んで進展している、つまり(1)共同体的所有〔原始共同体〕→(2)私的所有〔資本主義的所有〕→(3)共同体的所有〔組合的社会主义的所有〕。(1)はどの国においても遍く存在し、(2)は生産力の増大の不可避な段階で(1)に比べて一大進歩であるが、西欧諸国ではプロレタリアートの発生をも不可避にした、そのため再び高度の水準での共同体所有への復帰が試みられている。これが(3)であり、サン＝シモン、フーリエ、オウエン、ルイ＝ブラン、ブルードンらの社会主義建設の試みであるが、西欧では私的所有が普ねく根強く瀾漫したのでこの試みは、「何世紀もの苦難な試煉」を要する。しかし、ロシアは(1)から(2)に至る過渡期にあるので、無闇やたらに、社会的矛盾が歴然と露呈した(2)に移行することはなく、むしろ歴史の普遍的帰結である(3)への飛躍が考慮されなければならない。ロシアは(2)の西欧の資本主義を経ずとも、論理的にも、(3)に移行する可能なロシア独自の途がある。この歴史の論理的飛躍は『共同体的所有に反対する哲学的遍見の批判』(1858)の中で詳述されているが読論の論題にしよう。彼は歴史の発展段階を専ら所有形態の面から考察し、(1)の共同体所有は人類の特徴であってスラヴのみの独特の特徴でないとしてこう述べている、——もし我々が我国の農民における共同体的平等的所有への傾向が、専らスラヴ種族一般の、あるいは特にロシア種族のもつ国民的組織の何か内密な特徴であると考え積りなら、我々は完全に誤りを犯すことになる。……周辺のロシア農民を見渡す時、ロシア種族と無縁な農民も、少しずつ共同所有の卓越性を確信し、それを受け入れて来ている、と。この彼の見地は、スラヴ種族の固有の美風としたスラヴ主義者のものとも異なるし、先きの西欧派＝自由主義者チェリンの見地とも異なる。むしろ彼はヘーゲルの歴史発展の理論を採り入れたか、ヘーゲル主義歴史家グラノフスキーの見地(ニープールの見解も多分に含まれている)を踏んだものと見られる。

共同体的所有の経済的優越性は、ただ単にプロレタリアートの発生を防ぎ

止めているだけにつきない共同体的協業（協働）と不可分でもある。彼によれば(3)の組合的社會主義的所有の段階にあつては三つの下部階梯がある、①土地の共同体的所有、②共同体的生産（協働）、③共同体的消費であり、そして②は①なしでは存立しない、③は②なしでは存立しない。最も理想的な最終的共產主義社會にあつては、共同体的所有と共同体的生産と共同体的消費が一体となつた組合的同胞体である。彼は言う、——共同体的生産を伴なわない共同体的所有と、共同体的生産を伴つた共同体的所有との間には雲泥の差がある。前者はただプロレタリアートを予防するだけのことであり、後者は、このほかに生産の高揚に作用する。後者の形式は前者のそれよりも遙かに高くかつ有益である、と。分業が労働の生産力の高揚の最大の要因であるとするのがスミスの産業的労働の見地であるが、農業的協業が労働の生産性高揚の不可欠の要因であるというのがルイ＝ブランの *l'organisation du travail champêtre*〔農業労働組織〕論である。圧倒的住民大衆を農奴農民としていたロシアにあつて、当然のこと後者の理論が容易に採り入れられることは言うまでもない、チェルヌシシェフスキーはルイ＝ブランに抛つて共同体的労働 *общинный труд* を説くのである。ここにも共同体の経済的卓越性が認められる。しかし彼は続いてこう述べる、——それ〔共同体的労働〕は我国ロシアにおいてははまだ土地耕作者の慣行の中に存在しない。差当つては、この事業の効用について土地耕作者に忠告するにとどめなければならない、そしてその必要は時期早尚とすべきである。別のもっと大事なことがある。共同体的所有である。これには我国の土地耕作者は慣れ親しんでいる、これを擁護したとて我々が土地耕作者に何か新しいことを要求しているわけではない。我々は土地耕作者が慣れ親しんでいる原理がすぐれた原理であることを説明しているだけである、と。

こうしてチェルヌシシェフスキーは共同体的協業は当時のロシアの状態にあつては「時期早尚」としながらも、自由主義者の言うように共同体は農村経済の成功にとっての障碍であるどころか、②、③に進展して行く射程を考

慮に入れれば、農村経済の成功を促すものであるとしたのである。したがってハクストハウゼンの〔Ⅱ〕の提題は、自由主義経済学者の解釈のように共同体の解体論に至らず、むしろ逆に社会主義的視点から共同体の温存につながったのである。しかし、共同体を温存すべき理由には、歴史の発展理論と経済学的見地から見た卓越性以外に、尚人間学的功利的見地から見た卓越性もあげられているのである。『経済学新原理』の著者シスモンディとチェルヌィシェフスキーとの関係からこの残る問題点に立ち入ってみよう。

シモン・ドゥ・シスモンディ(1773~1842)は一級の歴史家として知られているが、それにも増してすぐれた経済学者としてロシアでは40年代から60~70年代の革命的ナロードニキの時代まで高く評価された。それにはいくつかの理由があるが、シスモンディの『経済学新原理』(1819, 第二版1827)の出版が、フランスにおいて一方にフーリエ、サン=シモンの空想社会主義が左の潮流を形作り、他方にスミス理論の歪曲と資本主義の声高い弁護をつとめたセイ、バスタアの俗流経済学が右の潮流を形成しているなかで、丁度中間を占めるような形で現われた、つまり一方では資本主義の矛盾を衝き、他方ではむしろ小ブルジョワジーの利害を擁護するというスタイルをもって出現したからである。その上シスモンディが経済社会の発展を農耕制度を尺度に、(1) 家父長制的農耕制度、(2) 奴隸的農耕制度、(3) 封建的分益制度(農奴制)、(4) 資本制的賃貸小作制度と分類し、自らは(1)にかなりの愛着を示していたからである。彼によれば(1)は、土地所有者が同時に土地耕作者であり、土地の改善に振り向けられた労働は同一人ないしは彼の子孫の享受につながるので、経験・知識を土地改善に資するよう努力する、しかも労働の成果が階級的利害によって分裂しないから人間の徳性と良俗にも資する。それに反してセイ、バスタアの *laissez faire, laissez passer* の原理は、富者に益々富をもたらし、貧者を益々貧困に追いやって、隷属と窮乏をつくる、商業の相次ぐ恐慌は産業と富の増大にも拘らず未曾有の不況をつくる。このようなシスモンディの社会主義的傾向を帯びた思想が、50~60年代のロシア

の革命的民主主義者の、60~70年代の革命的ナロードニキ主義者の心胸を打たないはずはない。チェルヌシシェフスキーもこの例外ではなかった、彼は学生時代に既に『経済学新原理』の第二版を読み、共同体論争がたけなわの時、再度これを読んでロシアの自由主義的経済学者の反駁にこれを活用している。チェルヌシシェフスキーにこの書が古典経済学以来の「独創性と新鮮さ」に満ちた書として映るのにはそれなりの理由があった。それは『経済学新原理』の指導理念が、まさしくベンサム功利論に基づくそれであったことによる。シスモンディによれば、国家統治の理論は社会に統合された人間の幸福をその課題とし、人間性と両立できる最高度の福祉を人間に保証し、出来得る限り大多数の個人をこの福祉に参加させる方策を採求することである。つづめて言えば国民的幸福、一般的福祉、全体の利益の増進に寄与することである。シスモンディは、全体の福祉の立場から、労働が富の唯一の源泉であり、節約が富の蓄積の唯一の方法であるというスミスの労働価値説と国富の論に、快樂こそ蓄積の唯一の目標であって、国民の快樂の増大が伴う時のみ国富の増大が可能であるという功利の論を付け加えたのである。そしてスミスの自由放任に替えるに政府の積極的干渉による統制をもってした。このシスモンディの見地には明らかにベンサムの功利理論の一般大衆利益擁護への適用が見られる。シスモンディが経済学を公共福祉の科学 *science du bien public* というのも、また好んで *la bienfaisance* なる用語を用いるのもいずれもベンサムの *benefit* や *good* の概念の敷衍である。ベンサムの功利論をラジカルに変容し、功利的人間学や経済学の仮定的方法に、また分配論に用いようと苦心していたチェルヌシシェフスキーにシスモンディの『経済学新原理』が共感を与えなかったはずはない。三年後チェルヌシシェフスキーが『資本と労働』（1860）の中で、古典経済学を俗流化したセイ、パスチアラと比べると彼は「巨人」であり、『経済学新原理』には「新しい生き活きた思想」と高く評価している。シスモンディは功利の原理を初めて経済学に導入した人物といわなければならない。次のベンサムとシス

スモンディとチェルヌィシェフスキーの経済学の対象についての言辞には共通可能な共通項が存在する。ペンサムはいう、「一国の統治権を掌握する人の実施しうる術と考えられる場合の経済学は、一国の産業に最大の利益をもたらすような目的に規制する技術である」(『政治経済学便覧』)。シスモンディは述べる、「国家統治学(science du gouvernement)はそれが目的とする一般的福祉を達成するための方法に従って二大部門に分けられる。人間は精神のおよび物質的欲求を感じる混合的存在であって、その幸福もまた精神のおよび物質的な諸条件から成っている。人間の物質的幸福は経済学の対象である。あらゆる人間の物質的欲求について、ひとはその同類に依存するものであるが、その欲求は富によって満たされるのである。……富はひとが相互の物質的福祉のために提供することのできる一切のものを示すものと考えることができる。そして政府に国富の正しい管理法を教えるこの学は、まさにこの点で国民的福祉の科学の重要な一部門である」(『経済学新原理』)。チェルヌィシェフスキーはJ・S・ミルの『経済学原理』を通読した上で、ミルの定義「経済学は富についての科学である」の替りに「人間の物質的福祉が労働によって生産される物と状態に依存するかぎり、経済学は人間の物質的福祉 материальное благосостояние についての科学である」(『J・S・ミル「経済学原理」露訳および評言』)という公共福祉の定義をもってした。チェルヌィシェフスキーがミルの経済学の定義を採用せずにシスモンディの方を高く評価していることを物語っている。そして共同体の論争が巻起った当初、彼はいまだミルの名も知らなかったし、その著『経済学原理』も手にしていない。彼が『経済学原理』に接した版は第四版の1857年刊であり、これを通読し露訳に手がけようと企てたのは1858年以降のことである。『経済活動と立法』(1859年末)に初めてミルのこの著作が扱われた。この史実から判断して、共同体論争当初のチェルヌィシェフスキーの経済学上の知識は専らシスモンディの『経済学新原理』に負うものである。またミル自身の功利主義が彼に影響を与えたものとも言えないのである。彼にとってはシスモンディはスミス、



リカードのまともな後継者で「新しい見解に導く新しい事実を豊富に」持ちこんだいわば社会主義的色彩を濃くした経済学者であり、彼が確立した新しい見解、つまり「労働者の理論」へ橋を架けた人の一人である。この意味で『経済学〈新〉原理』は文字通り、チェルヌィシエフスキーにとって〈新〉原理であったと言って大過ないのである。確かにマルクスとエンゲルスは『共産党宣言』の中でシスモンディを小ブルジョワ社会主義の首領として退け、レーニンも小ブルジョワ観点から資本主義の感傷的な批判を試みた人と評しているが、こうだからと言ってシスモンディがチェルヌィシエフスキーに影響を及ぼしたことを確定することが、後者がシスモンディ同様小ブルジョワ社会主義のカテゴリーに収まることを意味するものではない。しかしソヴェトの史家はシスモンディのチェルヌィシエフスキーへの影響を、ベンサムやルイ＝ブランのそれと同様に抹殺して来ている。これは敢えチェルヌィシエフスキーの歴史哲学や農民社会主義の内的構造を破壊するものであろう。

ここで再びハクストハウゼンの〔Ⅱ〕の提題に立ち戻り、チェルヌィシエフスキーがこれを功利の原理から論駁している点に立ち入ろう。彼はヴェルナツキーへの反論『土地所有について』（第二論文）の中でシスモンディの『経済学新原理』の第三篇、第八章「貸貸小作制度について」を援用するなかで、「農村経済の成功にとって所有者と労働者とが同一人であるような土地所有形態が、最高の形態である」というテーゼをたてた。このテーゼを単純化すれば「所有者＝労働者＝受益者」となる。彼はこのテーゼを次の論法でもって導出している、つまり、個人の利害感<sup>1</sup>は生産の主要な原動力であって、生産が成功するか否かの尺度となるものは労働のエネルギーの度合である、後者は一重に生産への個人的利害のかかわり具合に比例している。個人の利害感が生産物を所有しようとする志向にある以上、生産物を完全に我が物として所有することが利害感を最大限に満足させる結果になる、よって生産（労働）のエネルギーが十分に発揮されるのは、生産者の所有権が完全に保証される時である。したがって労働者はかれの手で生産されたものの所有

者でなければならぬ。そして生産価値の最も有益な分配は、最大の福祉または快樂をつくり出すことで、社会の各成員に属する価値の割合が、その社会の有する価値総額とその社会を構成する成員数との比率によって与えられる平均値にできるだけ一致することである。ここにはスミスの労働価値説と分配における「最大多数の最大幸福」のベンサムの功利の原理との融合が見出され、また「快樂こそ蓄積の唯一の目標であって、国民の快樂の増大が伴う時のみ国富の増大が可能である」という先のシモンディの見地に通ずる共通項も見出される。チェルヌィシェフスキーは、数年後にこの論法と観点に磨きをかけ、『資本と労働』（1860）の中で「勤労者の理論」として提示し、それを「資本家の理論」に対峙させた。「所有者＝労働者＝受益者」のテーゼを現実的に保証してくれるものは、チェルヌィシェフスキーによれば、言うまでもなくロシアのオープンチナのもつ土地の共同体的所有と利用の制度である。この制度の中にあっては搾取者も被搾取者も、西欧にみられる富の三要素説に基づく三つの階級分裂もなく、個人の利害の追求は必然的に共同体全体の利害の増大と福祉につながる。彼はこう述べる、——改善から発し、また労働から発するすべての利得は、勤労し改善する一人物に属さねばならない。それぞれの土地所有者は土地耕作者でなければならない。第一の理想の特長は農村経済の改善に関係し、第二のものは国民的福祉に関係する。両者が現実において実現されることが完全であればあるほど、農村経済と国民的福祉の成功は同じような条件において急速に行なわれる、と。この理想的理念の素地がロシアの共同体的土地所有であることを述べて更にこう続ける、——共同体的所有のみが、地代、流動資本の利子と労働とが同一人物に結合するようにする土地の分配であり、したがって彼はすべての利得を手にし、最もすぐれた様式で労働し、そして最大量の資本が諸改善のために支費される、そして出来得る限り地代を増大せしめる、と。しかし、ここで用いられている「利子」「地代」「資本」の経済学上のカテゴリーは無論その資本制的意義を失ってしまうはずである。しかし、チェルヌィシェフスキーにおい

てはそうなのであり、彼自身それを意識していた。彼はH・バプストの『人民資本増大ならしめる若干の諸条件について』(1857)とベンサムの“Tra-  
tés de Legislation civile et pénale”(『立法論』)を共に取り上げて論評  
した際、物質的資本と道徳的資本との一体性を説くと同時に、両者を人民資  
本とし更に国民的福祉という概念でおきかえたのである。このことは先に挙  
げたチェルヌィシエフスキーの経済学の定義一「経済学は富についての科学  
でなく……経済学は人間の物質的福祉についての科学である」ということ  
と符牒を合せている。

ここで彼の言う物質的資本と道徳的資本との関係と両者の一体としての人民資本について論及しよう。彼によれば、普通、「資本」なる言葉の下で  
了解されているものは、工場、機械、商品、交通路、土壌、原料、不動産証  
券、紙幣、株券、金銀の堆積等で、一般に物質的性格を有する。資本と労働  
との関係の中では、前者が後者を駆動させる点で資本が主で労働が副と考  
えられている。これがため労働者の労働の生産物が資本の所有者に帰属するの  
が当然の如くに考えられる結果となる。ここに資本抜きでは労働は無きに等  
しく、物質的資本の蓄積・増大こそ国富の増大であるという自由主義経済学  
者のもっともらしい主張がでてくる、資本家が労働者を当然支配すべきだ  
という主張もでてくる。チェルヌィシエフスキーによれば、これら見地は科学  
にとっても社会生活にとっても悲惨な破滅的結末に導いた、というのは富や  
物質的資本そのものをつくる労働とか労働エネルギーの性格が全く不問に付  
されたからである。労働や労働活動は、実は人間の道徳的〔精神的〕活動と  
切っても切れない関係にあり、それは知識の成熟度、勤労愛、教養程度、発  
明の才、節儉、誠実さ、道徳的規範、遵法精神、エネルギー的な活動、企  
業欲、慎重さ、分別力等の具体的形態をとって、これ抜きで労働一般を  
抽象的に論ずることはできない、むしろこれこそ労働エネルギーの主たる要  
因とも言えるからである。チェルヌィシエフスキーはこの点について従来の  
「資本」の観念を匡しながら資本と労働の主副を転倒させてこう述べる、一

我々が資本の規定をどうとろうと、建造物、貨幣ないしは紙幣の形で存在する物質的資本の外に、労働者の組織と結びついている別の資本が存在するように思える。道徳的〔——精神的——〕資本 нравственный капитал とも言えるこの資本は、物質的資本よりも遙かに重要であると思われる。最も重要な国民資本は人民における道徳的諸力と知的成熟の貯蓄である。……道徳的資本、これはすべての物質的資本の源泉であり、後者は前者なしでは発生し得ず、保持し得ず、ましてや前者の増大なしでは増大し得ないのである、と。これを傍証するために彼はロビンソン・クルーソの状態を仮想して興味深いたとえ話をつくった。いま二隻汽船があって一つはイギリス人が乗り、他はスペイン人が乗っている。嵐のため両船は難破し、互いに近寄った二つの島にたどりついた。イギリス人は荒野の島に、スペイン人は肥沃な島に。両国の乗客はロビンソン・クルーソの如く若干の衣服とナイフ以外に何も身につけずに島に上陸した。両国民の運命はどうかであろうか。10年経ってイギリス人の島を訪れてみれば、荒野だったにも拘らずそこには安楽な生活に必要な沢山の物財を見出すであろう。良く開墾された広い畠と収穫を見出すであろう。しかしスペイン人の島には肥沃な土地をもつにも拘らず、同じ光景が見出されず、その島の住民はひどい堀立小屋に住み、時々飢えに苦しんでいる有様を見るであろう。勿論、チェルヌィシェフスキーはイギリス人とスペイン人の育った国の各々の精神的文化、知識、技術、勤労愛といった諸々の道徳的蓄えの差異を前提にし、それがこの二つの島の差異を作ったとしているのである。道徳的資本が物質的資本より優位であるとするチェルヌィシェフスキーの見地には興味深い事情が反映されていると見なければならぬ。第一にスミスとの関係でみれば、スミスは『国富論』の中で固定資本として機械、要具、建築物、土地改良をあげ、最後にこう付け加えている、——固定資本は「社会の全住民または全成員が獲得した有用な能力からなる。そのような能力の獲得には、教育、研究または徒弟修業の期間中、それを獲得する者の生活維持ということがあるために、つねに実際を経費がかかるので

あって、それはいわば、かれの一身に固定され、実現されている資本なのである。そうした才能はかれの財産の一部をなすものと同じように、かれが属する社会の財産の一部をなすものである。職人の発達した技能は、労働を容易にし、短縮し、また一定の経費がかかりはするけれど、その経費を利潤とともに回収するような機械、または事業上の要具と同じようなものと考えてさしつかえないのである」(第二篇第一章)。スミスは技術、教養、能力等に「道徳的資本」という名称を与えなかったにしろ、ともかく固定「資本」の中に収めて考えていた点を、チェルヌィシェフスキーが再度吸い上げた。これは労働がすべての生産物の生みの親であるというスミスの労働価値説に由来しているが、チェルヌィシェフスキーが「道徳資本の中にすべての物質的資本の源泉がある」とすることによって労働活動、労働エネルギーの活動面に重点をおき、積極的にスミスの労働価値説を擁護したことを物語っている。後年彼は『ミル「経済学原理」露訳および評言』の中で生産の最大の出力は「生産過程の性格」と「労働の質」の相乗積の極大値に等しいものであるとし、「労働の質」の改善が「生産過程の性格」の改善と相俟って行なわれない以上、効率的でない」と主張している。ここで考えられているこの「労働の質 *качество труда*」とは先きに指摘した道徳資本と内容的には等価である。彼は労働を知的労働と肉体的労働に分割せず、両者の不可分な統一として扱った上で、物理的自然力にたいする人間の知的発達の優位性を説いて、その中でこう述べる、——生産の成功の諸要素のうちの唯一さえも、労働者の知的発達の程度ほどには大きな意義をもち得ない。気候、土壌、資本の蓄積、物理的力の強度——これらはすべて、人智の発達に比べれば、とるにたらない。すべては人智の発達から生まれ、すべては人智に発達に應ずる大いさをしか達成できない、すべてはそれによってのみ維持される、と。チェルヌィシェフスキーは『ミル「経済学原理」……』の中では「道徳資本」なる用語をミルに倣って物質的資本(固定資本と流動資本)のみに限っているが、しかし、この用語は「労働の質」という概念に取って替っているものと考えられる。



したがって物質的資本と道徳的資本との関係の考えは、後年、「生産過程の性格」と「労働の質」との弁証法的関係の中で深められたと見て差支えない。次に道徳的資本の物質的資本にたいする優位性の彼の見地は、観点を変えれば、ロシアの後進性の裏返し表現、つまり近代市民社会には既に自然的な有り方として存在する、啓蒙、教育、技能、徳性等々のロシアにおける完全なる欠如の表現とも見えるのである。

ロシアの農奴農民の「労働の質」は農奴法と専制によるアジア性、無知蒙昧、文盲、アバシー、非遵法、無<sup>アモラル</sup>道徳等々によって犯され、低級にとどめおかれている。物質的資本（生産にとって不可欠な物的資財）の生産主体である労働のエネルギーの質の改善が、近代的啓蒙と市民社会的資質の徳性によって遂行されないことには、物質的資本の増大そのものがおぼつかない。よってチェルヌシエフスキーは「労働の質」の改善を最優先として要請せざるを得なかった、しかもかなりそれこそ道徳的に要請せざるを得なかった。「道徳的」資本という用語は、まさしくこの事情を反映したものと見る事ができるのである。最後に物質的資本と道徳的資本とを一体にして人民資本とし、それをさらに彼が国民的「福祉 благосостояние」なる用語で置きかえている事情を検討する必要があるだろう。土地の共同体的所有と利用を母体とした彼の組合的同胞体(братство 後に товарищество の語にした)にあっては、土地や生産物の所有者とその生産物を享受する労働者とは全くの同一人であるという無階級社会が想定されている。したがって「資本」は、「新しい生産のための手段の役目を果す労働の生産物である」という規定を受けて、資本が労働と対峙して労働力を吸い上げるといった階級的威力を失って国民一般という性格を帯びる。資本制の生産様式を否定していたチェルヌシエフスキーには、「資本」は資本家の所有になるものでなく、むしろ社会的共同体的所有となるべき以上、もはや物質的「資本」と道徳的「資本」との区別は重要な意義を持ちえなくなり、人民的資本のカテゴリーに収まるもと考えられた。「資本」が「労働」に対峙する用法で用いられているなら、階級利害

の衝突のない社会でこの用語は死語となるであろう、むしろ善や幸福や有益の状態、有様と見られ得る。ここで彼はベンサムの言う「最大多数の最大幸福」の状態が「福祉」という意味になるとするなら、「資本」を「福祉—— благосостояние 幸福な事物の状態——」と置き換え得るものと見て、「国民的福祉 национальное благосостояние」なる公共的概念を用いたのである。チェルヌィシェフスキーがベンサムの功利の原理とシスモンディの国民的福祉の概念を「資本」にも適用しているのをここに見ることが出来る。

国民的福祉の増大を何よりもまず道德的資本の蓄積ないしは「労働の質」の改善に求めたことは、反面、知識、教養、啓蒙、道德的教化が歴史進歩の推進力であるという観念史観につながる面をもっているこのことは否めない。チェルヌィシェフスキーは啓蒙主義者として浮び出る、しかし40年代のヘーゲルの理性主義に依拠した歴史家グラノフスキーの哲学的啓蒙主義やポトキンの西欧化主義的啓蒙主義と異質である。それにしてもチェルヌィシェフスキーの啓蒙主義的一面は、彼による共同体の精神や慣行風習の過重視と内的構造をもつものであることを指摘しなければならない。これは彼の次の見方に歴然と表現される、——共同体の精神を、我々は特にスラヴの気質や大ロシア的気質に特有な何か内密な特質とは考えるつもりは毛頭ない。我々はただこう推測するのである、ロシアを長いこと家父長制的生活に近い状態にとどめおいた歴史的状况のため、この精神は我国ロシアに手つかずに十分保持されて来たが、我国ロシアよりもはるかに歴史的運動に参加した西欧の種族の慣行からはとうの昔に消え去ってしまったものである。かくして、それが我国に保持されているのは我国の歴史的発展の芳しくない状態に由来する。しかし最もすぐれた事物には、その悪しき面があるように、最も悪しき事物にもそのすぐれた面があるものである。我国ロシアの歴史的な不活発さは我国の過去においても、一部は現在においても多くの貧困の源泉となって来た、それは我国の文盲、我国の貧困、無知と貧困に由来する苦悩、不合理、欠陥の元兇である。例えば、それは我国のアパシー、我国の怠惰などの原因であ

る。しかし、これらすべての我国の不活発なはなはだ有害な帰結の中にきわめて重要にして有益となっているものがある。西欧の経済的運動はプロレタリアートの苦悩を産みだした。我々は、これらの苦悩が癒され、この病が〈死に至らずに健康をとり戻す〉ことにいささかの疑念をもつものでない、しかし、西欧にとって今この苦悩を辛抱することは、やはり辛いことである。そしてこれらの苦悩の治療には長い時間と巨大な努力が要求される。西欧の経済運動に、今まさに入らんとしている我国には、この運動と抱合せの病氣に対抗しうる解毒剤が保存されている、そしてもし我国が家父長制に対する嫌悪の余りに、この解毒剤を放擲してしまうおうとでも考えるなら、はなはだしい無分別というものである、と。これに彼は更に付け加えてロシアの共同体精神を讚美する、——土地の共同体所有のおかげで、我国に保持されている共同体的精神 *общинный дух* はまことに活き活きとしていて強力である、よって労働の共同体的生産、つまり西欧で非常に困難をもってなしとげられるこの事業は、我国では必要とあらばどこにでも難なく行なわれ得るのである、と。彼によれば共同体の労働、共同体的生産は生産力を高める主要な労働組織であるが、これは土地の共同体的所有を基礎においてのみ成立するレベルの高い生産様式である。よって土地の共同体的所有による共同体的精神がこの高いレベルへの大前提条件となっているので西欧諸国よりロシアの方が先に社会主義的生産に容易に移行し得るとかなり楽観視している。共同体の精神の重視ないしは過大視は、もとをたせば彼の啓蒙主義的歴史観に由来するものである、ただし18世紀的な「世論が世界を支配する」的な啓蒙主義ではなく、農民大衆の利害を擁護する社会主義的観念と深く結びついていたことは忘れるべきではない。その上、彼は所有の形態のみが農村経済と国民的福祉の唯一の基礎ではなく、近代市民社会諸制度——立法、公正な裁判、行政——の確立が不可欠であるとした、実はこの見地もベンサム的市民社会制度論に大きく負うものである。この点は改めて論ずることにしよう。ここで尚、共同体精神との関係でチェルヌィシェフスキーのとったスラヴ主

義者に対する姿勢を述べておこう。

ハクストハウゼンの『ロシアの国内状態……』はスラヴ主義者にも農村共同体擁護の点で大きな刺激を与え、彼らの言うロシアの国民性、ロシア正教的徳性、農民の連帯的精神性等の西欧物質文明に対する優位性に力を添えるものとなった。スラヴ主義者は『ロシア対談』誌を武器に1856年から積極的<sup>ザバートニキ</sup>に西欧派自由主義者のいう共同体解体論に反論を重ねた。И. А. ベリャエフ、Ю. Ф. サマリン、А. И. コシエリェフ、А. С. ホミャコフ、К. С. アクサコフらの40～50年代のスラヴ主義者がはなばなしい共同体論争に花を咲かせたが実はつかなかった。チェルヌシシェフスキーの1857年の『現代人』誌の論壇月評No. 4 No. 5は、もとをただせばまさしく、社会主義の立場からスラヴ主義者の共同体観にたいしてとった態度表明であった。当時共同体擁護に強弁を揮ったのはサマリンとコシエリェフであり、チェルヌシシェフスキーは特にサマリンを念頭においていた。スラヴ主義者サマリンはチェルヌシシェフスキーの共同体擁護もヴェルナツキーの解体論も共に西欧思想の崇拝に起因するとして却け、ロシア民族には固有の独自の歴史の流れのあることを強調し、ほぼ以下のように考えた。サマリンによれば、ロシア民族は個人の原理に立つものでなく、むしろ個人の自由や意識を消去した共同体的同胞精神の上に立っている、この精神はロシアの国民性 *народность* にマッチするもので他の国に類を見出さない。土地の共同体的所有には、土地割替の増大と不公平な分与地という内的矛盾を包蔵しているが、これは歴史的経済的条件の下で形成されたものでここから離れにくい、そして现阶段においてはその欠陥や矛盾よりも利益の方が凌駕している。ロシアは一般に農業生産が主で、共同体的生産は農民を土地に強く結びつけ、むしろ西欧的な私的所有に起因する様々な凶作や変災から農民大衆を護る便益をもっている。また、コシエリェフによれば、ロシアの農村共同体は現に存在するもので、廃棄さるべきほどの明確な欠陥や有害な事実をいまだもっていない、むしろ有害どころか農民の安寧と幸福を約束するもので、共同体なきは、農民にとって水のない魚と

同様の運命に陥るものである。ロシアの農村共同体はロシア独特の社会的機構である。各戸の分与地の用益権の世襲化によって共同体の組織は理性的で強固なものとなる。

このようなスラヴ主義者の当時の共同体観に対してチェルヌィシエフスキーはまことにまともな態度を示した、つまり彼は、西欧の文物の有害性を絶叫し、ロシアの国民性を高唱するウルトラ・スラヴ主義にも、またロシアの文物の有害性を絶叫し、なにがなんでも西欧化に踏みきって共同体をただちに解体すべきというウルトラ・<sup>ザハトニキ</sup>西欧崇拜者にも与しなかった。しかしスラヴ主義と西欧派＝自由主義者との論争の均衡関係から、共同体の擁護の点ではスラヴ主義者の方がセイ、バステアの俗流経済学者によってけがされた自由主義者よりも上位にあると評価してこう述べる、——この問題〔共同体問題〕について、スラヴ主義者の方が、思うに、彼らのやり損ないや偏傾を嘲笑する気である大部分の人々〔西欧派＝自由主義者〕よりも、根拠をもって思念していると我々がいまのところ言ったとしても、勿論、読者は次のことを容易に納得してくれるだろう、つまり、幾人かの後継者の部分的なやり損ない——他の誰よりも我々が少なくはないと考えているやり損ない——にも拘らず、また、この一派の数多くの後継者の理論的誤解——他の誰よりも我々が少なくないと感じる破産性を示している誤解——にも拘らず、我々はこの〔スラヴ主義者の〕活動を我々ロシアの社会にとって有用なもの何故考えるかを、容易に納得してくれるだろう。……彼らは現に存在する共同体的土地利用を農耕階級の安寧の最重要な担保 *защит*, 不可避な条件と考えている。この場合、彼らはいわゆる西欧主義者の多くの人々より上位に立った、後者は個々人の私的権利にただ魅せられ、その精神からして過ぎし日の古臭い体系〔セイ・バステアの俗流経済学〕から自己の確信を汲み取り、西欧の諸人民の科学と経験によってすでにその破産性がばくろされた体系の諸要求と合致しないものとして、我々の貴重な慣行に訳けも分ならず反対した。スラヴ主義者のすべての理論的誤解、幻想的夢中は、我国の村の共同体組織が、経



済的諸関係上の変更にあっても、不可侵なものとしてとどめなければならぬという彼らの一つの信念によってつぐなわれて、余りある。……読者は、我々の考え方を知っているのだから、勿論、現代の科学によってつくられた諸観念と矛盾し、我々の種族の性格とも矛盾するスラヴ主義的体系の混合物にたいして我々が特別に好意を寄せているものとは予想し得ないはずである。しかし、我々は繰り返すが、これらの誤解を超えて、スラヴ主義の中には共感に価する健康な正しい要素がある。もし撰択をせまられるなら、知的まどろみ、当世の確信の否定よりは、スラヴ主義を良しとするものである、と。一見するとここには是々非々主義の見地が見られるが、期せずして共同体擁護のみにおいてスラヴ主義者の一部の人と合致しただけのことで、チェルヌィシエフスキーの擁護の内実はスラヴ主義者のそれとは全く異質である。後者には社会主義思想の微塵もない。ついでに言えばチェルヌィシエフスキーは当時スラヴ主義者とは論争していない、西欧主義者とスラヴ主義者との論争はこの共同体論争でほぼ終結し、以後は革命的社会主義者と西欧改革派＝自由主義者との論争に転轍している。したがってチェルヌィシエフスキーの敵手は国民性、正教をたてにしたスラヴ主義者ではなく、ヴェルナツキーのロシア西欧化をはかった自由主義派であった。この意味では、チェルヌィシエフスキーを西欧派の中に数え入れることは正しくない。

以上、長々と考察して来たように、チェルヌィシエフスキーはハクストハウゼンが『ロシアの国内状態……』で提示したそれ自体両立不可能な提題〔I〕と〔II〕とを〔II〕の反論を通じて両立可能とすることによって、彼が西欧の資本主義に対置して設定した組合的社会的同胞体に資するものに改造したのである。とりも直さずそのことによってロシアの自由主義＝改革主義者テンゴボルスキーとヴェルナツキーのロシアの西欧的近代化論を論破しようと試みたのである。チェルヌィシエフスキーがこの理論闘争を開始したのは四年後に控えている農奴開放を意識してのものであることは、1857年6月上旬にA. C. ゼレヌィ宛の書簡の中に明白に示されている、——〈各々

の土地耕作者が土地所有者であって雇傭農民であってはいけません、自分自身のためにであって、小作人や地主のために働くのではあってはなりません。かりに解放に際して土地が共同体のものでなく、売る権利をもった個々人の完全な所有になるのであれば、たちどころに彼らは自分の分与地を売りとばして、大部分の人々は水呑百姓となってしまうでしょう。自由はあります、何時かわかりませんが、しかし必ずあります。私の希いたいことは解放が農民を土地なしの水呑百姓に転落させないことです！私は、前々から解放を企てている教養ある人々の考えをこの方向に向けたいのです、と。そして彼によれば土地の共同体的所有を母体としたもろもろの農耕同胞体 *земледельческие товарищества* は、まず第一に土地耕作者の生活を全面保証し、無産農民プロレタリアート *батрачество* の発生を不可能にし、行く行くは共同体成員による共同体的労働（協業）と平等なる手得による共同体的消費に至り、人格の発達と健康な理性の発達に全面的余地を与え、個々人の幸福と社会的福祉とが矛盾なく合致する社会、そして個人の利害の追求が生産の最大のエネルギーであって且つ社会全体の福祉の増大である友愛的、兄弟愛的社会 *братство* である。ここにはフーリエのファランジュの共同体と「魅力ある労働」が組みこまれ、且つベンサム「最大多数の最大幸福」の原理と勤労者の利害を擁したシスモンディの経済学の「新」原理が編みこまれている。

以上が、チェルヌィシエフスキーの農民社会主義の誕生における、ベンサムの功利論とハクストハウゼンのロシア共同体論とのベクトル図である。それは1857年の時点におけるものである。しかしチェルヌィシエフスキーの歴史哲学としての歴史哲学の本領が発揮されるのは、ロシアの発展の独自の途を論理の上で論証しようとした『共同体的所有に反対する哲学的偏見の批判』(1858)の論著においてである。ここで彼の歴史哲学は社会主義の誕生時と違った一つの別の相貌をとる。

使用テキスト

Н. Г. Чернышевский : Полное собрание сочинений, в пятнадцати томах,  
Дополнительный том, 1939~1953.  
Государственное издательство художественной  
литературы, Москва.